特有の事情重なり「成功」

中野 香織（なかの かおり）さん
服飾史家

1962年生まれ。大学特任教授などを経て研究所「Kaori Nakano」代表。著書に「ダンディズムの系譜」ほか。

政治家などが働きかけて、暑さをやわらげるために服装を変えようとする試みは、世界でもたびたび起きています。例えば英国では1930年代、「男性服改革党」が主導し、半袖半ズボンや通気性のよい新しい正装を提案しました。でも、ここまで成功したのは、日本のクールビズが初めてではないでしょうか。

明治のはじめに太政官布告をきっかけに一気に洋装が広がったように、上から言われれば、横並びで装いを変えるところがある日本人の傾向とも相性がよかったのかもしれません。

ただ、79年に大平正芳首相らが着た半袖スーツの「省エネルック」は、浸透しませんでした。長袖上衣と長ズボンという型を崩すことへの抵抗感があったのだと思います。それに対して、ちょっとネクタイをはずしてみよう、というクールビズは、受け入れられやすかった。いったん広がり出すと、スーツにリュックやスニーカーを合わせるのも当たり前になりました。それをいくら服飾評論家が「間違っている」と言っても、日本の暑さや満員電車という環境で働く人たちは、せめて服装だけでも楽でないとやっていられないのです。

クールビズは、産業構造の変化の波にも乗りました。ビジネススーツの直接の起源は19世紀半ばです。近代資本主義の広がりとともに、まず資本家が経済力を示す手段として着用しました。やがて労働者も大量生産のスーツを身につけるようになりました。誰が着てもそれなりに見えるスーツや威厳を与えるネクタイは、ビジネスマンを守ってくれる武器でした。同時に、資本主義の「歯車」であることの象徴にもなったのです。

資本主義のひずみとして格差が明確になった21世紀、本格的に拡大したのがIT産業です。彼らは、既存のシステムの外でビジネスを作ろうと、Tシャツにデニムのスタイルで、ネクタイを「隷属の首輪」とさえ呼びました。

スーツという武器を手放した男性は、おしゃれな人と、ただだらしなくなった人に、残酷に二分されてしまったと思います。一方で、威厳がなくてはいけないという「男らしさ」から解放され、自分なりの美意識を磨く方向に歩き出した男性もいました。

では、女性はどうでしょう。明治の洋装改革でもクールビズでも、上から服装を決められたのは主に男性でした。制服も減り、自由に服を着ていいはずなのに、周りから浮かないよう忖度したり、スカート丈の流行などを気にしたり、私から見ると横並びです。世界の女性の企業トップは個性あふれるファッションで、仕事も服装も自分で決めている。ビジネスで成功したければ、まずスカート丈を自分で決めることから、でしょうか。（聞き手・高重治香）